

龜
鹽

しづ
やり
ふか
ふ



龜鹽かめしおと云ふ、湖沼こせうあり。象形しやうぎやう、甲羅かふらを倣なす。

昔きやうもん、狭門きやうもんの入江いふなりしかば、汐溜まりて塩しほなむ凝ぎやうせにし、かくのごとく伝聞でんぶんくとかや云者いふあり。

明治甲子孟秋 彝之いの 藤次郎治衛門之丞とうじろうやえものすけ 『真神国波瀾萬丈史記』抜粹まがみ

(明治二十七年七月に彝之家出身の郷土研究家が記した地方史誌)

たとえば茨城県にある霞ヶ浦などは海跡湖であり、古代には北浦そとや外浪逆浦なさかうらを含めて太平洋側に開いた大きな入江であった。江戸初期の利根川東遷によって縮小、淡水化が進み、湖となったものであり、龜鹽湖と

は事情が異なる。

湖岸線わずか十一kmの龜鹽と霞とでは比すべき余地もないが、縄文中期の平低地が多く海であつたように当地も古代は確かに海であつた。大海神を祀つたと云う大柱神宮の伝説や磯に屹峻していた巨大な鳥居の伝説などは、まことしやかに伝えられるが、いかんせん全く物的な痕跡は見出されていない。

まがみ

真神郡に属する同地には宝龜八年に彥之健貞上盈こわさだじやうゑいの乱があり、これが

※

みねなり

まささだれつゑい

際に健公ながその弟岑勢、長子正貞裂盈らとともに湖岸で自刃せりとの記

なら

録（彥之南良『真神州軍史』寛仁三年）が残され、そのころ既に湖であ

てるまさしゅう

つたことが知られている。逆に海だったのは『真邦真州史』（彥之照匡襲

熙^き、応永二十七年）の記載などにも見られるが、地質学的な証明によるのが現在では普通である。

※ 彝之健貞上盈は公と称せられるべき位を持ったことはなかったが、当地で古来そのように尊称され続けている。

観光に興ぜられる向きではないから、敢えて訪う人もないが、いればさぞかし冬枯れが趣、と感慨するかもしれない。だが、私は夏の龜鹽しか知らない。

湖は灰褐色である。白鷺が横切るとなんとなく寂びたふうに見えなくもない。芦が繁り、樹木がまばらに点在する雰囲気が荒涼とも観ぜられるからだ。西南北からいくつかの小河川が緩やかに流れ入っている。水

流は湖畔の低地に達すると細く分岐して滞り、それが周囲に広く湿地帯をなしていた。

芦の原が目隠し代わりとなり、どこに流れがあるか土地の者でなくばわからない。地元人は棹で推して迷宮のような芦原の流れを行き来するのである。なお殆ど眼に入らないが、若干の水田もあった。

湿地帯は遠くを鬱蒼とした杜に囲まれている。丘がやがて山をなすが、これを越えれば私の実家のある龍^{りゅう}呑^{どん}村などがまた点在するのである。実家までは車で三〇分くらい（ただし、都市部とは異なり、信号機が途中にないため、近いとは言えない）だ。

私は湖辺八村のうちの一つ、長^{ひさし}村に家を借りて一夏を過ごしていた。

それまでは東京に独り暮らし、書肆に勤めて古書販売や自費出版を扱っていた。私が採用された時期はもう先が見えていたに違いない。なぜ雇われたのか、今でもわからない。額に皺寄せながら見積や請求書の作成のために広告代理店との打ち合わせから会社に戻ると、部長から終わりだよと言われた。バブル崩壊以降続いた不景気に二〇年以上も耐えたけれども、遂に資金繰りが不能になった、らしい。じゃあ、辞めますよ、と応えたように思う。就職してから一年と二ヶ月を超えたところだった。隠棲を考えた。なんとなく決めた。パソコンと自炊用の鍋を持ったが、携帯は持たなかった。実家に帰るつもりはなかったが、うらびれたよい

場所を探して結局、故郷の近場しか思い浮かばなかった。半端な行為だが、それを羞じたり叱咤したりする気持ち自体が既にどうでもよい、世間に通融した価値観のうちの一つであり、煩わしい、嫌悪の対象であった。

世間通融の価値など幻である、人間世界の身勝手な、客観性を缺く主観的価値観でしかなく、幸福の邪魔に過ぎない、としか思えなかったのである。むろん厳密に糾す気なら、劣等な価値観を否定的見地から批判することもまた世間に通融した価値観であると云う難癖もなくはない。世間を離れて生きることなどできやしないし、世に通融した論理から脱却することなど到底不可能事であろう。私の論理も実践も不備不徹底で

あつたが、当時にあつては晰らかな生命を持っていた。それらは次第に腐敗し、異臭を放つようになったのであつて、その生誕の曙にあつてどれほどか黄金を帯びた虹色の曙光に燦めいていたかを、さらにその夜明け前にはやがて出ずる生命を孕んだ空がいかなる清爽に澄み渡っていたかを人に知らしめる言葉を探そうとすれば、私の舌は烈しく縛れるのである。

隣には八十代の老夫婦が住んでいた。

我が棲家との間には垣根もなく、奥さんがいつも夕刻になると七輪の炭を熾してくれた。ご亭主は無数の流れが迷宮のように這う湿原地帯に長い棹を差して水底を押しながら、芦を分けて小舟を進め、沈めた籠で

鯉や鮒を獲っていた。

またどの家の脇にも小さな濠のように石組の溝があつた。清流が流れ、それが土間に引かれ、野菜や茶碗を洗ったり、米を研いだりするのに使われ、鮒や鯉が零れた米粒を食していた。僕の借りた家にもむろんあつた。雨蛙に見つめられたこともある。

その年の六月は雨が多かつた。私はよく傘を片手にぼんやりと出歩いたものだ。

芦原を往く老人をよく眺めた。小舟は四〇年来、ともに働いて黒く朽ち、水蘚が石化のように固着している。湿地に生えるわずかな木と一面の芦草と、そこに棹差す姿とは一幅の水墨であつた。どんな哲学よりも

甚遠な哲学だった。

老人は漁を終え、普通の成人が載れば重みに耐えられないような粗い結びの古侘びた棧橋に艫綱を絡め、そばに設置された野ざらしの木箱に無造作に鮎やら鯰やらを数匹投げ入れる。しばらくすると一匹の白鷺が来て次々一飲みに食った。

私は数日もしないうちに枯淡な気持ちになって行つた。

いつしか夜もパソコンのディスプレイの光のみで過ごし、九時前に寝るようになっていた。ときどき夜更かしをする。

二つ上の先輩にメールを送るときなどがそうだ。メールとは言つても、殆ど自分自身に語りかけているようなものであった。

たとえばこんなふうだ。

『私にはそうではないと云う反駁が考えられません。全てのリアリティは手ごたえのない沼沢に棹差すような感触でしかない。』

一縷の光もない漆黒に投ぜられた人間がやがて空気存在に猜疑を抱いて窒息の幻想に苦しむように、現実の辛酸も絶頂も人間界隈だけの主観としか思えません。けれどもそれもまた一つの主観でしょう。正義と呼ばれ、愛とされ、真実と崇められる諸概念にしても空架、ましてや金銭や名声や地位権力や人から得た讃美など、汚濁にまみれた醜怪な虚妄に過ぎません。

禽獣が美人に振り向くのでしょうか。振り向きません。人は彼らが愚か

だからと思うでしょう。彼らも考えます、人間とはなんと虚しい生き物か、と。思考のあり方の拡張子が異なるだけです。一切の生存は自分に理解できない者を劣悪と感じると云う原理で動く機械に過ぎません。一切は生存が仕組んだ絡繰りに過ぎない。生存への意欲はただ生へと駆り立てるのみで本質論的な意義も持たない。

生存への意欲がでっ上げた罠に嵌められ、騙されている。種の保存への志向に衝き動かされ、踊らされている。それでしかない。

一切は人間世界でしか通じない架空です。死に瀕したアンドレイ・ボルコンスキイ公爵が見たとおりです。

しかし私は一言附加することを忘れません。

架空であつても全くの虚妄ではない。もし目前で家族を虐殺されたとしたら、悲憤慷慨の鬼炎とならぬ人間がいるでしょうか。真実を告げて冤罪で断刑され、無念ならざる者がいるでしょうか。虐げられた者のために身を犠牲にして闘うも敗れ、難ぜられ、侮蔑に罵られるとき、天道を求めて叫ばずいられるものでしょうか。

現実には架空です。しかし実存であつて虚妄ではない』

まことや

真兮くんは初めて会った人は大抵驚く。少なくともこの田舎ではそうだ。髯を広げ、髭を蓄え、鬚が臍まで垂れている。腰までの長髪にはいつも同じフェルト地の尖がり帽（つばが子供用の傘くらいに大きい）を

かぶり、ほつれたリーヴアイスを穿く。年中同じ恰好で、革のサンダルが冬には蛇腹状に崩れたスウェードのブーツになるだけだ。あとはロング・コートを羽織ったりするくらいか。キャラバッシュ・パイプを離すのはデューセンバーク (Duesenberg Model J LeBaron Dual Cowl Phaeton 1929. のレプリカ) のステアリングを握るときのみ、デジタル・ミュージック・プレイヤーのヘッドホンからはいつでもキング・クリムゾンの『Larks' Tongues in Aspic』が猛烈に音洩れしている他に、意味もなく片眼鏡をどこかのポケットから出す気取り癖がある。

彼の実家は村の骨董屋だった。龍吞に骨董屋の需要があるかと言えない。元は豪農であったが、曾祖父が道楽で始めた商売だった。祖父は

これを継いだが、到底生業と成り行かないところから、父親は村役場に勤続三十数年、じきに定年である。

ところが、真兮くんは転向をまた向け返るかのように店を手伝い出し
ていた。だから私同様、暇なのである。

骨董『春深堂』（正確には『恩顧士結城春深堂』）は龍吞のメイン・
ストリート、参神道の一岐道である龍吞神社表参道沿いにある。

安房市龍門町から真神郡の最奥、真神村までを繋ぐ参詣の道が古くか
ら真神参りのために踏まれ、私たちの龍吞村を横断しているが、慣習的
に旧街道と呼ばれる真神参神道を村に入ってから龍吞神社に向かって折
れるとそれがもう表参道で、路の両側に古薨が連なる村の中心通りであ
メイン・ストリート

り、彼の家や私の実家などが居並ぶのである。

参詣路沿いのこれら旧家は皆家と家とが殆ど附いて建てられ、正面間口は三間ほどしかなくも、家屋はウナギの寝床のように奥深い。真兮くんの家も横に狭く、店内は雑然としていた。

店に入ったことは二回くらいしかない。しかも最近である。真兮くんとは小中高校と同じ学校だったが、そのころにはまだ交友関係がなかったのである。

新入社員だった去年のことだ。盆休みの帰省を終え、東京に戻るため独り、憂鬱な気持ちで龍吞駅に向かって歩いていた私は道の路肩に停まっているデューセンバークに気が付き愕いたのである。なにしろ一面水

田でその中に島のように塚と木立とがあるのみの場所だし、そのときはレプリカだと知らないのだ。

ボンネットが高貴な深紅で、フェンダーが暗鬱なアズキ色、全体に鏡のごとくぴかぴかだった。シルバー・パーツは眩く、クリーム色の幌が上品、開いた窓からパイプの紫煙が上がっている。

たかふし
「隆臥、だつたと記憶するが？」

くらひげほひげあごひげ

髭 鬚 髯 の中から鼻が突き出た顔に見覚えがあつた。

その長髪を数ヶ月前までは時折見かけていたからである。トレードマークの円錐形尖がり帽は天井にあたって折れていた。いつも帽子が根元から倒れている理由がこのとき初めてわかった。

「そうです、平衛ひらえ（私の姓）です。真兮くん、ですよね？ お久しぶりです」

「近頃見なかった気がするが」

「はい。この四月から東京に勤め始めましたから」

「大学は卒業したか。たしか龍溪大だったと聞く。無事就職も決まったか。ふんふん、まことに祝着の限り」

「は。そうですか。」

「いや、ありがとうございます」

真兮くんは、と訊きかけて彼が事実上の家事手伝いなのを思い出し、喉仏を上下させた。

「でもすごいですね、デューセンバーグ。どこで見つけたんですか。高かったんじゃないですか」

「いや、ニセモノにも妙味あり、って云う奴でね。

良く言えばレプリカだがね。フオルムを模しているだけさ。安っぽい
まがい物なんだ。実にハードボイルドではないかね？

なによりか、これの本物を購入するは、ちくとばかり難しくもあるか
らなあ。実は哥舞妓かぶきくんのところにあつた奴でね。前のオーナーは自己
破産したらしく、それゆえ廉価に仕入れられ、小生の出世払いと云う申
し出も快く受諾されたわけさ」

あまの

天之哥舞妓くんはこの真神郡一帯の趨勢である彝之家の一分家、天之

家の当主天之泰丞左衛門の曾孫、真兮くんの親友である。同家はさまざまな事業を展開しているが、一つに中古車販売があり、真兮くんはその恩恵に与ったと云うわけであつた。そうでなくばだれが彼の出世払いなど取り合うだろうか。真兮くんも感じてはいたようであつた。言いながら片眼鏡を取り出し、モノクル眼窩にはさんだのは間違いなく照れ隠しだつたと思う。

私は色白で癪の強そうな細面の哥舞妓くんを思い出していた。細く柔らかく赤茶けた髪、いつも暗い眼をしていたが、車好きで、家業の一部である中古車販売も半ば趣味であつた。そしてそれとともに、彼の家の高麗門が鮮やかに記憶に甦つたのである。

哥舞妓くんの家は真神村にあった。だから小中学校は異なっていたが、高校は同じだ。ちなみに大学も同じはずだったが、終にキャンパスでは見かけなかった。遠くはないが、近くもない存在であった。

いつ真神に行ったのだろう。瞼に泛ぶ陰翳は鮮明なのに事実関係の記憶は模糊としている。

瓦屋根の土塀に囲まれ、広大な敷地に森のように高木が繁る天之家のお屋敷は本家の豪壮に比べ、高麗門にふさわしく風雅であった。それとも夢か。

高校時代の哥舞妓くんは一時的に赤茶の髪を朱色に髪を染めていた時期があった。バンドを組んでニルヴァーナのコピーとかしていた。ノイ

ジーで破滅的なサウンドだ。ニルヴァーナのメンバーは全員両親の離婚を経験している。リーダーは銃を咥え、顔を吹き飛ばして自殺している。自殺当時の彼はまだ人気絶頂だった。

私にしても好きなグループである。

高校の文化祭のときに哥舞妓くんのバンドが『レイプ・ミー』を憑かれたように演奏して皆が引いてしまった話など、私が入学する前のことだ。以来、真兮ちゃんと親友になったと聞く。どうして真神村にある屋敷を見たかは思い出せないが、いずれ、龍吞の隣村だから見たこと自体に不思議はない。

ちなみに高麗門がなぜ高麗門と云われるかは不明と言われているらし

い。

我が悲しみ

“ Moja, bieda ”

午前二時。

私はディスプレイを見つめていた。

映っているのは、一枚のセピア色の画像だ。

紙にくるまれたなにかが写っている。くるんだその上からリボンで結んである。リボンで結ぶなどと云っても、華やかな蝶結びなどではない。

無造作に一回巻いて片結びとも言えない崩れた片結びで緩く留めてある。

同じように走り書きで素早く、少し強めに記されてある。それが 我が Moja

悲しみ

,bieda ”

シヨパンの直筆だ。

一度は結婚の約束もしたマリア・ヴォジンスカをシヨパンが初めて訪ねたときに彼女がくれた薔薇の花を入れた封筒、彼はそれに記した。彼女からの手紙もその中には封印されている。

真つ暗な部屋でディスプレイの光に照らされ、私はただ、茫然と見ていた。

マリアはだれを愛していたのか。なにを愛していたのか。フリデリク・シヨパンとはだれだったのか。なぜ非存在があるのではなく、存在があるのか。いったい、これら言葉がなんだと言うのか。

悲しみ、いったい、それはなにか。深淵の底に流れる四重奏の低音部のことか。これが生きると云うことなのか。

或る日の私のメール。

『現にある痛みを癒すことが人間にとっては最大の真実である。この痛みよ疾く去れと欲するが人間である瞬間の、人間という体験の、真実である。とすれば苦しみを緩和し、人間を苦しみから解放するが実存の真実と認められるべきである。コペルニクスやダーウインの示した、生活感覚を超越した発見のように均しく静寂なる理性のみを湛え、人間的実存を天叡とも呼ぶべき清澄のまなざしに照見し、そこに啓かれる智慧を

のみ、神が人に賜う真実であると謳うべきである』

かように悦ばしくも暗鬱なる瞑想に深く囚われたのは血を流しながら手を合わせ膝を突くキリストの、天仰ぐ像の画像を見ていたときであった。インターネット上に残虐な画像は少なくない。だが、これは全く異なったインパクトを与えた。多くのニュース的画像が与えるのは苦痛に対する敗北でしかない。キリストの受難像が私たちに与える衝撃は苦痛に対する勝利である。

苦痛の超越と云う問題に關して言えば最たる参考とすべきが帝政ローマのキリスト教殉教者であるとするは、だれも異存のないところではないか。仏教も優れて苦痛の除去を叙説する叡智であるが、キリスト教に

伝存する記録から受ける天啓に襲われたかのような強い崇高、及び静寂なる充足に澄み切った明晰を伴う恍惚ほどに速やか、かつ直截に人を救済へと導くものを他に知らない。

私はキリスト教徒ではないが、このように認めるし、異他を均しく認められることが最高に神を讃える行為の唯一であると考えて。神が人にかように創りたもうたからだ。人類史に晰らかだ。それを全うするが神への最大の祭儀、礼拝、供養ではないか。

問題は正しい思想や真実の体现ではない。それら一切は言辞に過ぎない。要は苦痛の除去であり、幸福の欣求だ。それが自己肯定であり、言い換えれば自己保存、生存であり、畢竟は種の保存である。

私に天叡による恩寵をお授けください。

龜鹽に住んでいたところに頻りに散策したのは、一つに鬱血が脳髓を暗鬱に沈めるのを防ぐためでもあった。

シヨーペンハウエルでさえ食後には笛を吹いたのであるから、厭世主義的な私が龜鹽の自然に心慰めていたとしても罪はない。

芦原の湿地にはところどころ島があったが、地元の人でないと全くわからない。私などが見渡しても、ただ芦が水面から群生している漠たる風景しか映らない。人に聞いて島があることを知っているに過ぎない。

数えて八十七歳だった滋賀さんが漁った鮎の大きさに愕いた日のことだ

った。

「鯉ではなかったんですか」

「鮒さあ。

見てわからんかや。そうら、こつちが鯉さ。ずいぶん形が違うさね」

「ええ。そう言われてみれば確かに。一緒に獲れるんですね」

「そうさな。大概な」

「どうやって獲っているんですか」

「モンドリって言ってな、籠をな、仕掛けとくんさ」

「罨ですか。それらしいものが見あたりませんけれども」

「ああ、そりや水ン中、置きっ放しだからな。獲るときだけ引き上げて

な、またすぐ沈めとくんさ」

「今まで気が付きませんでした」

「そりやなあ、島の陰辺りに置いてくからなあ、見えんかったんだろうさ」

「島？　島なんかあるんですか」

滋賀さんは笑った。

「ああ、そんだな。他所ン者には見えんかしらんさ」

どうと云うこともない日常の会話だった。鼻の下を甲でこする滋賀さんの手にはめられた作業手袋はゴム製だったはずだが、酷く傷んだ皮革製にも見えた。草臥れ、沁み附いた汚れと瑕と裂けたような皺だらけの

感じが似たように覚えさせたのか。

漁った魚を突っ込んで置くポリバケツも縁が割れ、欹けている。白鷺が枝の上でお約束を待っていた。滋賀さんは急ぐでもない。淡々と舟上で腰を屈め、片付けをする。

歳月が総てに深みを与えていた。それは叡知に思えた。皆知性を有するのだ。普通それに気が附かないのは、知の様式が異なるためであろう。その拡張子が異なるため、一方からは他方の知の存在可能が生活感覚的に知性として映らないのだ。

時間性は存在と云うことが持っている自己開示性を展開させる働きを持つ。その地平が存在者によって異なるのだが、いくらかでも自己を脱

すれば他者の自己開示様式が独自を示すことが叡智として映ずる。そう思う。

だが、こんなことはいくら言っても予測でしかないし、実証の方途もないし、中東平和の役にも立たないし、ユニセフの募金に応じて医療に恵まれない子どもたちにワクチンの一つでも投与できるよう計らう方が余程重要事である。リアリティである。真理であり、真実であり、正義でもある。

私は実務的な善のアイデアを求める。真兮くんも（いかにも前世紀半ばのカウンター・カルチャーふうの彼は普通の人がらそうとは見られないだろうが）同じだ。一切の論理は人間にしか通用しない架空でしかない。

実在ではない。

言葉を要さない現実が真の思想だ。私は釉薬を使わない焼き物の素地が做す風景に甚深な思想を覩ずる。滋賀さんの手袋はだれも賞讃しないし、芸術でも哲学でもない。人から在り難がられるような特異性から生じる価値はない。だが紛れもなくリアリティであり、実在する。そんなことは一々口にする必要性も意義もない。どこにでも転がり、だれしもがいつも観ているからだれ一人知りもしない。かくの如く曰まうさく私もだ。

梶取堂かとりと云う一丈四方ばかりのお堂が、一番大きな島である梶取島にあるのを知ったのも、その後、いくつかの島々を廻ってからだ。自力で

は舟を扱えないので滋賀さんが棹突く小舟に便乗し、頻繁に寄り道して
もらっているうちに知ったのである。

「ここはさ、大昔はお宮があつたんさ。どれくらい昔かつちゅうても、
ようさ、知らんがさ。

後からお寺さんが明王さんをお祀りするようになったらしいんさ」

これがかつては社だったとすれば少なくとも江戸中期以前ではないだ
ろうか。このお堂自体が江戸時代の建物に見える。欄間部分にある透か
し彫りがそう思わせた。瓦はなん度か替えているだろう（それでもだい
ぶ落ちている）が、彫刻はオリジナルだろうと踏んだのだ。勘だが。

彫りは相変わらず龍だ。ここら真神の一帯には古代から龍神信仰があ

った。真神の趨勢であつた彝之家が有する土地には総本山と言ふべき真神山があり、その山頂には大磐がサンスクリット文字の「ノ」のよう縦に屹とし、聳えていた。磐には上から下まで雷霆の「ご」とく亀裂が入っている。彝龍之裂と呼ばれ、崇め奉られ、注連縄がされ、女人は拝することが許されていなかった。

私は県の教育委員会に行つた。村教委で用が足りず、県から出向している人がいて、県教委を紹介してくれた。そこで埋蔵文化財センターを紹介してもらい、三日後、主任研究員の三里さんと云う人に会つた。

「正式には智証正叡寺真如堂梶取分堂と云います。あそこは昔から船人に神聖視されていました。太古には大きな入り江、若しくは袋状の湾だ

った龜鹽の中に泛ぶ極小さな島でしたが、そのころから既に信仰の対象になっていたようです。

そうですね、梶取堂の建立は元禄元年です。智証正叡寺の奉納帳に寄進者の氏名と年号とがあるので、ほぼ確実でしょう。お堂の建つ以前（かなり以前だと思います。お宮があつたころとお堂が建つたころとの間には、かなりの時間が空いていたものと考えられているのです）のお宮についてですが、これに関しては詳細な記録がありません。小さな祠だつたと思われますが、どこの神社にも記録がありません。

ただし、彝^{いの}之^の八州兵衛^{やすべい}と云う人物が天正壬午の年に鯛と鮑と米俵とを奉納したと自らの始末帳に記しているから西暦一五八二年にはまだあつ

たのでしよう」

「『武威偏執し、世は戦国となりし比』、ですか」

「ですね。」

その手の記録はそれ以外にもたくさん書かれていたでしょうから、もし他にも発見されればさらに詳しくわかるでしょうけれども、そのみが偶然に発見されている以外、現状では検証すべき資料がありません。

多くは処分されたか、散逸してしまったのだと思いますが、いずれ、反故紙にされた資料などがまだでてくるものと期待はしています」

「今ある資料はどうやって発見されたのですか」

「ご存知かもしれませんが、いのとうじろうやえもんのすけ彝之藤次郎治衛門之丞です。

彼が土蔵の一つから備前の壺の入った箱をだしたところ、その中に購入年月日と購入者の記名押印した紙が入っていましたね、実はそれが反故紙で、裏面には元々の文面、つまり始末帳の記載の断片があつたのです。

壺自体は上等ではありますが、ありふれた江戸期のものでした。

資料となった反故紙は今でも彝之真神国史料館で公開されていますよ

「

ふうん。

偶然の発見、壺の購入記録ですか。

なんか、そう云うもんなんですな

「ええ。

あと梶取堂関連のものには現地で行われた地質調査の結果などがあります」

「大量の花粉が見つかったとか」

美里さんが怪訝な表情をした。私としてはシャニダール洞窟の発掘調査に引っかけた高尚な冗句のつもりだったが、通じなかったらしい。イラク北方にあったネアンデルタール人の遺骸周辺の土壌標本から花粉が検出され、死者に花を捧げる習慣が既に四万五千年前にあったことが世界に知られた、と云う例のあれのことだ。

「いいえ。

検出されたのは焼炎反応です。

検体となった地層から割りだされた年代の幅のうちには天正年間も入っているところから、諸文献との整合を鑑み、天正から元禄の間に焼失したものと特定しています。

と、まあ、以上ですかね。

なお他に当センターが二年前に発行した小冊子にも記載がありますから参考にしてください。

あ、それから祭神ですが、同じく八州兵衛の帳面に『武甕槌之御神に畏敬み御奉り御納める』とありますところから、少なくとも武甕槌之神の分御魂が祭祀されていたものと私は考えています」

美里さんはファイルを閉じた。

埋蔵文化財センターから最寄の駅までは路線バスで十五分だ。その場所に戻り着くと曇天で降りそうだった。新興住宅街の小さな駅で注文住宅やマンションや大型スーパーがあり、歩道の敷石は色模様があつて花壇やマロニエの並木が潇洒ぶっている。ありがちな駅前コーヒー・ショップの小さな円卓に中折れソフト帽を擲つ。肘を突き、親指と人差し指とを顎にあてて脚を組んだ。

歩道側が全面ガラス張りで駅舎が見えていた。中央に母子像と花壇とがある新しい、安価なケーキのデコレーションみたいなロータリーだ。

その戯画ぶりが薄っぺらいプラスティックの平板のような、乾いた音のように見える。神経を逆撫でる焦燥の快さがある。快さが堪えがたく、私は目を逸らした。

ブレンドを飲みかけのまま席を立った。

単線一車輛の電車に乗り換える。

滋賀さんに借りて初めて自分で棹を推した。梶取までの距離は歩けるものなら一分とはかからないものだし、そのときは独りで行きたかったのである。

堂身は一丈四方だが、瓦屋根は左右に小さな切妻を附し、大きく反り

ながら伸びて二丈四方。軒下も深い。柱の上には枅や肘木、いわゆる斗枅と云うものが組まれ、虹梁ごはいが向拝柱を突き抜けた部分には欄間の透かし彫り同様、龍が刳形に彫られていた。

扉は上部が格子になっていて、堂内の不動明王像が朧に見える。

無意識に扉に手をあてた。思えばお堂に直接触ったのはこのときが初めてだった。揺れた。引く。開いた。鍵がかかっているものと思い込んでいたので驚く。

不空羂索神変真言経や大日経にも叙べられた明王、火炎光背の右手には利剣を、左手には羂索を持ち、一筋に編んだ辮髪を左肩に垂らし、脇待として矜羯羅こんがら、制吒迦せいたかと云う二人の童子を従える。その背に負ってい

る火の鳥は迦楼羅と云い、その神鳥が光背の火炎を吐出し、明王の光背はこれによって成るのである。

その姿は種字なる尊形、そのものである。

内部は格子から指す薄い光に泛ぶ二畳ばかりの広さ、ただの板の間である。像にも床にも埃が積もっていた。

矜羯羅童子は色白く、賢そうに柔和な顔をし、胸の前で合掌している。穏やかな像であつた。制吒迦は肌が赤く、腕白そうな顔立ちで両手に金剛棒を持ち、構えている。

不動尊としては一般的な姿形であり、私の眼をとらえたのは尊像ではなかつた。

その夜、真兮くんに送った。

『先輩は、異多琉^{いたる}と云う人物を知っていますか。本人がそう云う振り仮名を振っているから読み方は間違いないと思います。

変わった名前ですからペンネームだと推測しますが（ただし戦時中のプロレタリア作家でペンネームが熱田五郎、本名が澁谷天珍^{てっじ}児と云う人もいましたから、変わっていると云うだけで筆名と断定はできないでしょうけれども）、寡聞にして異多琉と云う作家を知りません。

ただ私が無知なだけかも知れませんが、十中八九は偏執的な素人であろうと思います。そうだったらどうでもよいことです。ですが、このま

ま胸に収めることはならんぞよと脅かされているかのような、不穏な動揺を覚えるのです。

話が突飛でした。事実を叙べます。梶取堂の観音開きを（偶然に）開けました。私としては、開いてしまいました、と言いたいぐらいの感じでしたが。

そこには、普通に不動三尊像があつた他に、どう云うわけか十数冊の和綴本が積んであつたのです。

私は躊躇しました。が、大して古そうでもないので、気を付けながら手にしました。埃をかぶり湿気で頁と頁とが貼り附いて波打ち、黴臭かったけれども、江戸期とか明治とかのものではありません。素人目にも

晰らかです。数年か、せいぜい十数年ぐらい、滋賀さんや来栖さんに尋ねても、十年くらい前から置いてあつて掃除（年に一回、村人数名で掃除に来るらしいです）の邪魔だとは思っていたが、場所が場所だけになにか奇特的な意味があるのだらうと思つて敢えて手を触れなかったのとでした。

丁寧に剥がすように一頁一頁をめくりました。小説です。どれも同じ内容でした。だれかが自作した作品を頒布するために（だったら、なんでこんなところに放置するのか疑問ですが）自家製本したものらしい。紙は和紙風ですが、和紙ではありません。レーザー・プリンターで印字してあります。フォントは書家の手書き毛筆をベースにしたような精密

な草書体が主で、篆書や甲骨文字も交じっていました。

ですが、意外に表紙は普通の隸書体フォントと楷書体フォントとが使われています。隸書がタイトルで楷書が著者名です。参考までにイメージを送ります。

こんなふうです。

『空』

異多琉

非常に興味が湧きましたが、インターネットで検索しても、異多琉と

云う人物の情報が得られません。なにか知っていたら教えてください。

それから著者のくだらないナルシズムだとは思いますが、私には巻頭に添えられていた次の言辭が異様なものと感じられ、胸騒ぎのようなものに駆られるのです。

「この小説は実在している。山や海や風のように。インクや紙として実在しているのと同じように、小説存在として屹然と、苔生す磐や古い樹木の風格のように実在している。

こいつは俺の生誕の有無にかかわらず存在していたし、存在しているし、存在し続ける。たとえば人類が滅びても、永遠に存続し続ける。だ

れが書いた小説も同じである。ストーリーや主題は小説存在としての価値になんら関係がない。

そう主張する。これが俺の欲望だからだ。愛の情熱や魂の成長や存在の不安に、なんの興味もない。俺の書くものは明晰なるヘヴィ・メタルだ。It's very well done.

個人的な欲望の普遍化？　だが、それがなんであろうか。この欲望はいつどこで生まれたのか。俺の欲望は脳幹を占拠する爬虫類時代の脳から噴き上がっている。初めて細胞分裂したときにも遡る。宇宙開闢時代に達する。人間のそのような欲望がなにを要請しているかを伝えられようか。言語諸概念を絶し、だれもが既に知り、だれも永遠に知ることが

できない」

どうです？　ちよっと引きますよね』

私は送信し終わってからいつもどおり暗い部屋で考え込んでいた。小説存在とは、なにか。小説存在として実在するとはどういう状態を言うのか。なん度読み返しても要領を得なかった。インクや紙などの物理的な^{エクステンション}拡張（空間占有）以外で、かつストーリーや主題に関係なく、磐や古木の風格のように実在している？　少しわかるような気もしたが、説明が附かない。考え抜いて結局、途方に暮れただけであつた。

翌日、真分くんが隣家の住人みたいにぶらりと来て縁側に片膝載せて

坐った。

「メールでもよかったんだがね、来てみたよ。デューセンバーグが外にでたがっていたもんでね。

失礼してパイプを喫させてもらうよ。

ふん。

しかし、君も面白いもんを見つけたもんだね。拝見させてもらおうか。話の様子じゃあ、物を持ち出して来ているようだから」

「わざわざ来てもらって、すみません。

そうです、一冊持って来てしまいました」

「ふん。よくはなかったかもしれないが、まあ、仕方ないさ。もう持つ

て来ているんだから。

どれ。

ふんふん。

隆臥、小生はね」

案外鋭く和綴を見据えながら言う。

「異多琉を知っているよ。会ったこともある。と言うか、君は知らなかったのかね。小生もこの冊子は初めて見た。彼が小冊子を有していたことは知っていたが、自作の、こう云うタイトルの小説だとは知らなかった。

だが、こうして手にすれば多くのことがわかるよ。

この本は毛筆手書きの原稿をスキャニングして印刷したものだ。製本は手作業で行われているね。なん部ぐらい作られたかまでは見当もつかない。

それ以外は。ふうん」

まるでシャーロック・ホームズだ。

「そうだな。

見たまえ、これは絹の繊維が混ざった白い手漉きの和紙だよ。雲龍紋が金線で刷られ、彼にしてみれば高価な品だったと思う。

こう云う逸品には、黒い漆の地に金の雲龍、雲の部分に一部朱色が附された筆がよく似合うだろう。ならば硯は青黒い石で九龍の紋が彫られ

たもの、墨には一対の龍が玉を奪い合うように遊んでいる姿が金で描かれていなければなるまい。

おっと、これは空想だがね。では、小生の知る事実を述べよう。

彼はいわゆる作家ではない。控え目に言えば専業作家ではない。そして十七歳で死に、既に十年が経っている」

真分くんが龍吞村立龍吞中学校の三年生だった当時、真神村の「異多琉」は有名人であった。容姿を見たことがなくとも、少年らには怖い存在であった。凶暴な不良学生だったわけではない。それはたとえば坂本竜馬が土佐の故郷ではこどもらに恐ろしい人と印象付けられていたのと

似ているのかもしれない。

真神高校の二年生、真神郡に隣接する安房市の街頭でバンドを率いて路上ライブを行い、さまざまな奇行を演じていた。過激な行動によって警察沙汰となった事件を起こしたその翌月、古の聖地、真神山の山頂（と言っても海拔百数十mくらいか）に独り登り、焼身自殺を遂げた。噂は瞬く間に郡市一帯に広がり、真分くんも強い衝撃を受けた。

「その事実の小生を根底から畏怖させた。それを説明することは簡単なようで難しい。突然、生きていることが不安になった、とでも言おうか。だが、また同時に小生がやりたかったことを全く羨ましいほど純粋に、生死の壁がなんの障壁でもないかのように鮮やかにやられてしまったこ

とに対する嫉妬と羨望との入り混じった、小生自身の深奥が小生に向かっておまえも裂けて死ねと脅迫するかのような畏怖だった。

彼の路上ライブを見たことはなかった。まだほんの、田舎のこどもだったからね。小生が生きている彼を見たのは一度だけだ。その存在を噂では以前から聞き知っていたが、実物を見たのは偶然、真神線の上り電車の中でだった。

ちょうど黄昏時、彼はギターケースを杖のようにして寄りかかり、扉の傍らに立っていた。恐らく神中州へ向かう途中だったのだろう。冬休みの終わったころだ。その一カ月後に彼は死ぬのだが、当時は知る由もない。周囲に他のバンド・メンバーの姿はなく、独りだった。

彼であることはすぐにわかったよ。クリムゾン・レッドに染めた長髪、左額から左頬を伝わり、顎まで走る青い龍の刺青、他にだれがいうか。西の山翳に落ちる茜の夕日を凝視しているようだった。斜陽に照らされた彼の瞼は二重どころか、くつきりと陰翳を刻む三重、若しくは四重だね、憑かれたような無為の表情をしていたよ。大きくて虚ろな眼だった。眼球は白い部分がかなり多いんだ。そのせいか、一方向を見ていてもどこを見ているかわからないような、なんか逝ってしまったているような感じがあつてね。

見てはならぬものを見てしまったかのように眼が離せなかったが、それは或る種堪えがたい感覚だった。立ち去り難い感情を抱きながらも、

同時にいたたまれなく、小生は薙久簀なぎくさの駅で降りたが、最初から薙久簀町の古本屋に行こうとしていたから別に一大決心で降りたわけではないのだが、降りてはいけなような気持ちがして随分思い切った末に降りたような気分がしたものだ。しかし、やはり遁れたくもあつたがね。

それが最初で最後さ。

後に異多琉の死に関して小生はさまざまな理論化を、ときには人格化にも近い教義を附したが、ともかくもまず彼の死を聞いて受けた衝撃波は理論性のある概念ではない、強烈な、ダイレクトな概念群として小生を襲った。理論化以前の生々しい理論として小生を襲ったのだ。

小生はその苛みから遁れるために無意識的に解決を求めた。当時は自身はその答を求めていると明確に自覚はしていない。意識して行動するようになったのは漸く高校も卒業に近いころだ。

まあ、調べるまでもなく、小生の同級生の中に彼の従兄弟がいたので話としては以前からぼちぼち聞いてはいたが、それを意図して詳細に聴取しようとしたり、バンドのメンバーに直接会いに行ったり、路上ライブで常軌を逸した伝説的な行為をした場所を訪ねたりしてみるようになったのだ。

一度は真神の山にも登ってみた。彼が燃えながらおちた彝龍之裂の大磐も見上げてみたよ。

しかし、結局は断念した。

もうどうしようも行かなくなつて煮詰まつたのさ。あまりになにもなさ過ぎた。それになにを考えようが、死には追い附けないと云う一面もあつた。小生もうまく説明できないが、リアリティそれ自体を相手には闘えない。ただ小生自身の欲望を仮託するに留まるような、そんな気がしてきたせいもあつた。

もしあのころ、この『空』が手許にあつたならばもつと違っていたかもしれない。だが、当時はこいつを知らなかった。和綴本をライブの最中に燃やしたりしていたのは知っていたが、それが彼の著作だったのか、なんだったのか、知ることできなかった。小生が訪ねた彼のバンド仲

間も教えてくれなかった。小生から聞かなかったせいかもしれないし、だれも気に留めていなかったせいかもしれない。

だが、今これを手にして強く確信している。あのとき炎に包まれたのはこれではなくてはならないとね。彼が聖域で焰を以て死に裂けたように、『空』も狂裂したのさ。真理は現実の行動にしかない。真理はその真実性ゆえに現実的な力だ。^{force}君は時を経た物象から森厳さや通常の諸概念ではない叡智で射抜かれたことがないか」

ならば彼の著述とはなんだったのであろうか。だから彼は小説存在な

どと言ったのであろうか。

『

………

書齋の隣にある小部屋の桐

の戸棚を開けた。

そこには代々収集した茶陶が蔵されている。箱に収められた上に袋に入れられたものから、ただ紙に包まれたもの、剥き出しのまま置かれたもの等々ある中で、志野が目に残まった。手に取る。傾けたりしながら、景色を眺めた。

粘土を踏み圧し空気を抜いた上で捏ねて整形し、釉を塗って重ね、窯

を以て高温で焼いたに過ぎぬものである。ただの焼かれた土である。冷えた感触が掌や指尖にある。凹凸の起伏の感じがある。

いわれ経緯もなく余りに唐突に、奈良の大神神社の記憶が甦った。千鳥唐破おおみわ

風の拝殿の奥尖には、ただ脇鳥居を左右に附した三輪鳥居があり、磐座をいわくら有す三輪山が聳えるばかりの、本殿のない有様がまざまざと泛んだ。

あるがままと云うこと、木や草や土や磐や雫や蛇や蟋蟀や風や。

それは謂わば途方もなく古い存在である大樹だ。驚嘆すべき老樹である。いく千年を経て動かざるその沈黙は遙かな無臭の古薫として存在している。彼の持つ叡智こそ諸概念によつて齎されるものとは遠く隔たつた、深く多様で、活きた、言説にならず、実在する叡智である。

貴方の叡智をお与えください、私はそう懇願した。だが、厳かなる老木はかるらかに笑う。

「君は何を言うのかね。

私より古く、わずかに姿を変えてはいるが、数百万年の星霜を経てなお現存する長老がおるというのに」

「それはだれですか」

『見るがよい。あのいわお巖じゃ』

だが巖は手を振って物憂げに顔を背ける。

「愚かなことを。

わしがいつ現存などしたか。過去から存在し続けていると言うのか。

わしは一瞬たりとも同一性を維持したことはない。かたちを変えても現存と言うなら全宇宙の存在者が皆最古参である。

一切は宇宙開闢時に生まれた物質の結合のさまざまなパターンでしかない。現在あるものは一切あり続けたものであり、わしら存在者は皆ともに最古参者である。

いや、物質だけではない。エネルギーも光も空間も運動も時間も音波も思考も一切は開闢以前にはなく、開闢以来あり続けたものである」

「ならば私たち存在者よりか古い者がいます。宇宙開闢以前の無です。彼こそ最高の古参者で叡智の保持者でしょう」

「重ねて愚かなことを言うか。宇宙開闢以前はない」

「知っています。だから無と言うのでしよう。でも無として存在していたはずです。だからこそ全存在者は無でしかなかった時代の或る時点に突如生じたのです」

「おまえはわしの話を少しも聞いておらなんだか。」

宇宙開闢は或る時点に起こったのではない。それまで時間は存在していなかった。宇宙は或る時点から膨張し始めたのではない。開闢は過去であり、未来でもある。

一切がその開闢以後に生じ、開闢以前にはなかった。

開闢に至るまでの経緯などない。

原因などなかった。

因果に関係なく、生じたのだ。いかなる制限もなく、いかなる事が起こることも許されていた。いかなる了解も追い附かぬ永遠の把握不能である。

だから宇宙はある。

いかなることも許されなくば、どうして開闢しようか。かくしていかなるにも縁取られず、過度の自由として今もある。だから現在である」

「それでは、いったい、宇宙とは」

「開闢以後も以前もあるものは。同じことだ。でなくばどうしてこうしてあるか。それがおまえらの実存にも合致するではないか。

さにあらずと反駁すなら、おまえは摩訶般若波羅蜜多心經の咒の主旨

を叙べられるか」

私は既に廊下を歩いていた。既に下駄を突っかけて庭に出ていた。

すなわち既に茶室へと向かつていた。坐す。炭を熾し、茶釜を掛けた。

すみとり

炭斗から炭を取り出す。香を炉にくべた。野雁の羽箒の下に隠れていた桑柄の火箸を指にはさむ。湯気が立ってきた。碗を置く。棗を開けた。

茶杓を搜す。

しらたけ いっぱん ひ

白竹の一本樋の、中ほどに竹の節がくるように詔われ、蟻腰の見掛、

ありこし

うるしづき

たけべら

きれ

丁寧^{うるしづき}に漆拭がされた竹篋^{たけべら}が、裂^{きれ}に包まれた棗の傍らに斜めに置かれていた』

（異多琉 著 『空』 より抜粋）

安房市の神中州町に噴水がある。駅前広場の拡張の際に築かれた。異多琉の路上ライブが頻繁に行われた場所の一つでもある。私たちはここに来ていた。その奇妙な景観に眺め入っていた。

かなり大きな、壮麗と言ってよい噴水（であつたもの）である。

コンコルド広場にあるものを模倣して造られ、一時は話題にもなった。動性に溢れる彫刻が四方に向かって躍る構図である。夜にはライトアップされるよう装置も備えられていた。設置時は若者で賑わったが、後に予算削減でライトアップが中止され、水も止められ、私たちが二人で来

たそのときにはオブジェでしかなかった。

かつてこの噴水が炎上したことがあった。十年前のその日、異多琉は路上ライブの最後に噴水に向かってガソリンを撒いてから儀式のように和綴本に点火し、噴水の最上段の盤に投げ入れた。瞬く間もなく唐突に遂げられたため、現場にいた誰もが起こったことを理解できず、ただあ然とし、異多琉一人が聖火台のように燃え上がった噴水盤を恍惚と眺めていた。

本名、彝之イタル。真神村、彝之家の出身。県立真神高校の生徒が創ったロック・バンド『V・V・W（クオドラプル・ヴィ。V・V・Wとはベリー・ベリー・ウェルダンの略であるが、Wを二重のVと見做し、

全体で四重のVとした名称)』第一期のヴォーカリスト、かつギタリストである。滴るごとくに艶やかな緋色の髪が異様に鮮烈であり、動脈から噴いた血に濡れているかのような色であった。その長い緋色の髪を靡かせ、振り乱し、歌う姿は我と我が身とを破り裂こうとするかのようにであつたと云う。死ぬ三ヶ月前に入れた青い龍の精緻な刺青(正確に言えば、この刺青は死の三〇週間前から入れ始めていた。細緻を極めた精密な図柄であつたため、比較的大きくなく、電動具で彫られたにもかかわらず、線彫りに五回通い、一ヶ月近くを要した上、着色にはなお二ヶ月を要した)が左眉毛の上辺りから左頬を裂いて顎に達していた。県条例では十八歳未満の刺青を禁じていたが、刺青を入れ始めたころは殆ど学

校に来ていなかったし、転々として自家にも帰らなかったため、制御する者はなかった。

語りながらも、真吟くんは感慨深げ思いに耽る。

「当時彼がカリスマ的な存在だったと言う輩もいる。よくあることさ。だが、そんな思い込みは全く彼の到達しようとしたこととは関係ない。むしろ侮辱だ。」

異多琉の偶像化など小生に言わせれば彼の志向に反する。彼は路傍の小石のように自然であるべきと、少なくとも理想としては考えていたと思う。でなくば、いく許か人の理解を誘うような要素があってもよかったのではないか。

人間は人間でしかない。全てはでっち上げだが、この批判自体もそのでっち上げの構成に協力する一細胞でしかない。

『人間は人間でしかない』、実在するのは蛋白質と水とだけである。それ以外にあるかのように見える全てはインパルスが齎す作用の内部的な存在でしかない。そこで起こっていることは化学的な反応でしかない。

ニューロンの樹状突起にある受容体に神経伝達物質が附着すると特定のイオンの流入孔が開き、脳神経細胞外から特定のイオンが細胞内に流入し、内と外とで正負の電荷の関係が逆転する。この電位の変動によって生じる電位差が発火現象として表現されることをインパルスと言い、それが軸策にまで伝わるとシナプス小胞をを刺激し、神経伝達物質を分

泌させ、同じことを繰り返す。かくてインパルスは伝播するのである。

人間はただそれではない。もし今日の諸科学の観察が事実に即しているとすれば、だがね。さて。

こうした認識は珍しいものではなくなったが、しかし未だ人々の生活世界的な感情に反する。だが、同時に人はこうした反逆性を楽しんでもいる。停滞を破砕する瞬間にヴィヴィッドが感じられるからだ。そしてそれをリアリティとして感じる。人は現在の殻を脱し、より非主観性であらうとし、客観性を認識に獲得しようと志向する。客観性への志向とは、他者性の発見への志向だ。自殻を自裂することである。人間存在の志向は裂散にあると言っても差し支えない。

だが、かく云う批判自体もまたインパルスであるとすれば、いったい、この説明自体がなんになるのであるうか」

『書肆イル・ポリーフイロ』は神中州にある古本屋だ。古書販売とともに自費出版小冊子や蔵書目録などの簡易な印刷製本を自前でやっている。柳通り商店街のはずれにあり、元は昭和初期から続いていた印刷屋だったが、平成十七年に倒産し、数年後、普蕭さんが残されていた機材ごと買い取って今日まで営業しているものだ。黄白色に再塗装された古いコンクリート造りの社屋に暗緑色の木扉が附いている。

あまひらふしゅう

天平普蕭は二七歳で、もし異多琉が生きていれば同じ年であり、真神

ほむら じょうがんしゅうこく

と龍吞との間にある畝邨（貞観正國寺で有名）の出身、真神高校における私や真兮くんの先輩でもあった。第一期『V・V・W』のベージストでもある。

弓形の眉を顰め、いつもなにかにらんでいるかのような思索家の眼差し、尖った顎に繊細な驕慢があり、真っ直ぐな髪を真中できれいに分け、顎の辺りで平行に切りそろえていた。

真兮くんから見れば二学年上の先輩であり、二人は真神高校在学中に直接面識がある。

普蕭さんは私が持参した和綴本を手にし、しみじみ眺めた。

「これが今ごろ出て来るとはね。

イタルの奴は、これを三十冊以上作つたと思う。あの噴水の中で燃えたのもこれさ。実は読んだことがないんだ。奴はだれにも読ませなかった。

いや、正確に言うと、そうじゃない。路上ライブのときに集まった人に向かつて投げたことが一回あった。あれが拾われたか、そのまま路上に置き去りだったかは知らない。見届けてない。

奴が意図していたことは、だれにもわからないさ。死んだし」

私は第一の疑問をぶつけた。

「梶取堂には十二冊が置かれていました。なぜあんなところに置いたのでしょうか。まだ十数冊残っている計算になりますが、どこへ消えたか

心あたりはありませんでしようか」

「ないね。」

全くわからないよ。奴がなにを考え、なにを狙い、なにをしようとしていたか、なぜ死んだか、なにもわからない。死の前日まで普通だった。到底死のうとしている様子はなかった。なにも、仄めかしさえもなかった。全く感じられなかったよ。

奴はとにかく超越的な考え方をしていた。人に認められるとか、人や社会に役立つとか、そう云う観点から動いているのでは全くなかった」

私は重ねて訊ねた。

「彼が死んだときの状況は真分くんから聞きましたが、ご存じのことを

詳しく教えてください」

「人に知られていないような特別な事実はなにも知らないよ。

彝龍之裂の大磐の上に攀じ登って身にガソリンをかぶって火を点じ、飛び降り自殺した。それだけさ。さっきも言ったが、その前日に俺たちはバンドの練習で会っていた。奴は全く平常だったよ」

この話がされた日から十年遡った年の二月、正午のことである。異多琉は真神郡一帯の最聖域である真神山に登り、頂上の磐に攀じ登って（どうやって屹立する磐に攀じ登れたかは謎である）自らに火を放ち、約一〇mの磐上から直下の磐棚に頭から落下し、死んだのだ。

私は当時、卒業間近の小学六年生であったが、事件を知らずにいた。

普蕭さんの書肆を訪ねる前に真兮くんに教えてもらうまではそんな事件が身近にあったことに気が附いていなかったのである。

私はさらに問うことでその理由を知った。

「そのときは『空』を燃やさなかったのでしょうか」

「聞いてないね。」

ただなかったかどうか確実にはわからない。紙の燃えた痕跡があったかどうかなんて警察や親族に訊かなかったし、少なくとも当時の警察の発表にはなかったな。

事件は新聞には載らなかった。全国紙はもちろん、県紙にもね。なぜだかはわからない。彝之家の力だったかもしれないし、未成年への配

慮だったのかもしれない。いずれ、俺は知らない」

最初の挨拶を終えてから後、黙っていた真兮くんが漸く口を開いた。

「真神の火祭を復活させたのだとは言えないでしょうか」

真神の火祭は記録にわずかに残るのみ、詳細は全く知られていない。

大昔は例年の祭祀だったらしいが、天正七年以降、一度も行われていないからだ。同年の火祭の最中に村が野盗に襲われ、多数の死者をだして以来、それを忌みて行われなくなってしまったのである。

普蕭さんは黙考していたが、重たい口調で応えた。

「あり得なくはない。」

奴は音楽や文学に实际的な力が備わることを欲していたように思う。

或る意味、宗教が芸術の究極の昇華であるかのような考えを持っていた節がある。

通常において音楽や文学はそれを受感した人間の胸でなんらかの感銘となつて始めて芸術化する。それ以前はただの空気の震えであり、紙とインクとに過ぎない。つまり音楽や文学の存在とは普通、音や色彩や形象や言葉や文字自体ではなくて、それらから与えられるインパクトによつて惹き起こされる感興のことだと考えられている。

だが、奴は音楽や文学が旋律の美しさやリズムのかつこよさ、叙べられている内容に関係なく、それ自体で芸術であり、哲学であることを望んでいた。それが真実である以上、実在する一つのフォースであるべき

だと考えていた。それはプリミティブな宗教感情に繋がるものだと思う。

俺には全く理解できなかったがね。

それよりか、真兮、おまえ、イタルの従兄弟と同級だったろう。訊いてみたか。奴の家は彝之家の本家なわけだし、イタルの家はその分家筋であるわけだし」

「ベ太郎くんのことですか。

いや、彼からは既に殆どを聴いています。

大した事実は把握してないですね。一族内でもタブーだったんでしょ。大人たちは少なくともこどもの前では口を閉ざしていたようです。

貴兄が仰るところと概ね変わりがありませんよ」

「貞観正國寺は行ったか」

ばらみと

「叭羅蜜斗くんのところですか」

「そうさ。叭羅蜜斗はうちのバンドのドラマーだったんだぜ。イタルの奴、お寺にはよく顔をだしていたようだ。古来の聖域には人知の及ばぬ特殊なパワーがあると想定していたようだったな」

「むろん行きましたよ。随分前です。」

当時はイタルくんが各所に著作をばら撒いているとは知らずにいましたから、和綴本に関してはなににも訊ねずじまいでしたがね。

叭羅蜜斗くんからも特別な情報は得られませんでしたよ」

「だろうな。」

俺も奴からなにも聞いた覚えがないし」

「まあ、ゆっくりやります。

ああ、それから。

クオドラプル・ヴィの再結成の話があるようですが」

「そうだよ。

よく知っているな。

だが、再結成と言うほどの話じゃない。先月、叭羅蜜斗がこの店に来てな、そんなようなことを言ったんだ。で、俺もいいんじゃないか、つて応えた。

それだけさ」

「しかし、イタルくんがヴォーカリスト兼ギタリストでしたから、それ代わるお人がどうしても必要でしょう。

ちなみに小生も、太郎もギターを弾きますよ。ここにいる隆臥もブルース・ハープを吹くし」

「考えておくよ」

その夜、私は龜鹽に帰ると蠟燭を立て陰翳に揺れる文字を追うように『空』の一節を読んだ。

その部分は彼が超越と云う概念をどう云うふうに加え、使っていたかが窺える部分だ。作中ではかなりわかりやすい部類に属する箇所（と言

うか、他のところは私には殆ど理解できなかった）であつた。また真分くんの言葉と重なる部分もあり、私でもいく許か理解できなくはなかったのである。

異多琉は主人公にこう言わせていた。

『「なぜなら諸概念の一切は、生物が生きて来た経験を累々と積み上げた歴史の産物だからです。その累積は層と層との境界線を持たず、無限とも思われる重なりとなって遺存しています。

今日ある諸概念一切は、実に我々が単細胞生物であつた時代（或いはそれ以前）からの重層なのです。それは縦の重なりでも横の重なりでもない、奥行きの重なりです。

さあ、開けたままのお口をふさいで戴きましようか。貴殿にお訊ねいたしましょうや。畢竟、我々の生きる世界をどのように考えられるか。

炙られた鮑じやあるまいし、むずむず唇を動かされるのみか。

わかりました。いや、よいです。お聴きあれ。

たとえば生きるとは、世界を持つことに他なりません。他者との干渉や、他者を以て做す情、考慮や、活動すべてです。それなくしてはいつたい、いずこへ足を向け、眼差しを遣り、何をか志せと言うのか。すなわち他者との関わりを指す。自らの殻からの超越です。アメーバイデアのような生物であつても、世界観を以て生に臨み、そこには既に諸概念の揺籃期の姿があるのです。先天的に内奥在し、いずれからともなく湧出する

動機に衝き動かされて世界を做し、世界へと超越するのです。

虫類が飛んだり、蠢いたりする運動空間や、諸細胞内の有機的な化学反応も一つの世界であり、諸概念の祖先です。我々の脳幹の上に爬虫類の脳髓があるように、数億年来、最も単純な諸活動から積み上げられ、その結果が今であり、我々は生まれたときから全世界を知っているのです。

世界観は生命発祥の動機の奥から迸るのであって、外界の模写として生じるではありません。

その奥在する動機は、太初においては、物質的反応によって顕在しました。これが諸概念の原形です（そう云う意味では、有機物は、いや無

機物さえ諸概念を持つと言えるのかもしれませんが。

やがて刺激に対する反射として、生命活動、生きんが為の行動が生じ、それが原始的な世界観となりました。そして後代には行動と情動とが境界のない緩やかな分節を做し、反射が内部的には感受としての情態を做し、行為を促すシグナルとしての意味を持つようになります。これを強引に区分して概括し、無理に普遍性を附与し、だれが見てもそれ自体として独立した一般と做し、俗に言うところの諸概念としたのです。

ここで気が附くことは、諸概念が外界の反映として生じたのではなく、奥在する動機によつて構築されていると云う点でしょう。

さて、私にはこれら世界観の変遷史が、自殻的たるを拒み、より外へ

けはふ
解放されんと欲し、解脱求むかのごと観ぜられるのです。

エクスターゼ

脱自態たらんと志向せるかのように直観せられる。宇宙開闢のビッグバンが既にその性格を持って生誕したかのようにさえ感じられる』

貞観正國寺はその名のとおりに貞観年間に建立された古刹である。

元は法相宗であつたが、鎌倉時代に一度荒廃していた。そこに突如、金剛峯大為樂と称す真言宗の僧が現われ、観世音菩薩が夢に現われ我に告げたとか音声し、東奔西走、艱難辛苦の末、寺を復興させた。それ自体は大変なことだが、話としてはよくある話である。室町の時代のことであつた。

以来、本堂はいく度か焼失するも今日に至り、現在の建物は元禄期の再建である。

私と真兮くんとはよく晴れた夏日の空の下、寺の石段を踏んでいた。普蕭さんを訪ねた翌日だった。

叭羅蜜斗さんには真兮くんから連絡がしてあり、庫裏を回ってすぐ私家に通された。廊下を渡ると書院造りふうの客間だった。

「早速ですが、昨日電話したとおり、イタルくんのことです」
真兮くんは坐るなり、切り出した。

叭羅蜜斗さんは染めた金髪を逆立て、いつも丸いサングラスをしている人だった。

「その冊子は俺も知っているが、ここには置いてないよ」

真兮くんは少し考えてから言う。

「イタルくんは、智証正叡寺真如堂梶取分堂というお堂の中に十二冊の『空』を置きました。状況から考えて彼自身が置いたとしか考えられません。仏教以前からの聖地であつた可能性が高い場所です。彼は聖域に、彼にとって至聖の自著を置いた。イタルくんはそれを意識し、特別な意図を以て置いたのだと思えます。秘儀参入的な意向、風水学的な思料を感じるのです。

最後に彼は真神山と云う最聖域で事を起こしている。そう云つた事実を鑑み、彼自身が多く親しんだこの寺の聖域に、なにかを残した可能性

が十分考えられるのです。心あたりがありませんか。

御寺のどこかに秘められた奥社のような聖域がないですか」

「なくはないが、去年の暮れに掃除をしたときにもなにも見つかっていない。

念のために言っておくが、本堂はもちろん、老大木の洞など、それらしい場所にはなにもない。昨今は怪しげなことをする人間がいなくもないから、最低でも年に一、二度くらいはチェックしているんだ。

その限りではなにも見ていない」

「そうですか」

真兮くんは再び考え込んだ。

叭羅蜜斗さんが少し語気を強めて言った。

「もしもイタルに一貫性のある意図があるとすれば、お堂とお山とには、なにか連関があるはずだ。その連関がこの寺になくば、ここに『空』があるはずがない。

どうだ。そう云った連関が考えられるか。単に個人的にイタルが親しんでいたと云うだけでこの場所を特定するなら、やや奴の意図を甘く見てはいないか」

言われてみればそうである。私も真兮くんも頷いた。暫時の沈黙。

「地図がありませんか」

唐突に真兮くんが言った。

叭羅蜜斗さんは半分立ち上がりながら応えた。

「ああ。むろん、あるよ」

真兮くんが私を顧みて言った。

「隆臥、そうさ。当然考えているべきであつた。気が附いてしかるべきであつたよ」

私たちは数分後、周辺地図を広げていた。

「ご覧あれ」

真兮くんが指差した。

「ほら。」

真神山を中心としたとき、梶取堂は真北に位置している。

そしてこれだ」

神中州町の位置に指尖をあてる。

「神中州は真西だ。ちょうど噴水もこの辺りではないか。そして南は」
真兮くんの指尖の行き着いた場所を見て叭羅蜜斗さんが嘆息する。

「なるほど。そこはイタルの実家だ」

真兮くんも深く頷く。

「そうです。自己を聖化するイタルくんにとって彼の生誕地が方位的に
聖域との連関を持つことは好都合の偶然でした。或いは運命かもしれません
せんがね。そんなことをだれがわかりましょうか。

それにしても凄いですね。どれもぴったり西南北です。しかし、驚く

にはあたらなひのかもしれない。イタルくんの家は偶然でしょうが、お堂は古代人がお山を意識して真北にあたるその位置に設けた可能性があるし、神中州は人が集い住むにあたって方位的な吉凶を勘案したと考えればあり得なくもない。

さて。では今度は東を見てください」

だがその方面には聖域と見做せるような場所は特定できない。さらに東を見れば海があるばかりだ。

「なにもないようですけれど」

私はそう言った。

だが、真兮くんは首を横に振る。

「いや。海がある」

「そりゃあ、海は神聖かもしれませんが」

私はなおも反した。

真兮くんが微笑む。

「気が附かないかね」

叭羅蜜斗さんが再び唸った。

「そうか、それか」

「そうです」

真兮くんが言う。

「隆臥、よく見たまえ。安房島がある」

安房島とは真神の湾に泛ぶ大岩である。注連縄がなされ、厳肅に屹する立方体はやや縦長、平らかではない上面は十二畳ばかりの広さに若干の草と低木と、大きく傾いた四本の松と生えていた。そこに小さな祠（お社と呼ばれているが）があると聞いている。ただし、渚や海面からは見えない。

江戸時代中期に真神の藍染めで龍神の紋を入れた布を奉納したと云う記録が残されている。文献的にはそれしか知られていないが、古来信仰の対象であつたことは晰らかだ。私も夕日を背に湾に立つその姿に崇高を感じた経験がある。

真兮くんは哥舞妓くんに電話を入れた。翌日午後二時、私と叭羅蜜斗

さんと真兮くんとが畝邨の駅前で待っていると、コンロッドがクランクシャフトをヘヴィに回すシボレーの重低音が聞こえ、トラックに小型ボートを牽引させた哥舞妓くんが現われ、運転席から鬘ふうの髪を載せた頭首を突き出す。

私は古代ローマの建築に飾られるメデューサの首、或いは矜持と猛々しさと神巖とに溢れた海神ポセイドンの巻髪を思い出したが、それが伝心したのか、

「ひよう、隆臥か。久しぶりだなあ。またおまえも奇妙なことに首を突っ込んだもんだ。暇人の真兮はともかく。」

さあ、アカイアの民よ、船出の時は迫った。ペレウスの子アキレウス

よ、アトレウスの子、神のごときアガ멤ノンよ、いざ出発だ。

そうら、おあつらえ向きのお天気になりそうだぜ」

暗鬱な眼差し、白皙の膚に赤茶けた髪、どこか癪の強い病的な感じを抱かせる風貌に似合わず、豪放磊落のふうを気取る癖がある。そのいかがわしさが『Larks' Tongues in Aspic Pt.2』のリフのようにメタリックだ。

その表層性にいわれのない不安を覚えて遠く東の山の空を望めば、暗雲を孕んで哥舞妓くんの双眸の暗鬱のようだった。叭羅蜜斗さんがシボレーの助手席に乗り、私は真兮くんのデューセンバーグの助手席に乗る。真神湾に向かって出発となる。

小粒の雨が降り始めた。真兮くんが言う。

「このぐらいなら、たぶん問題ないと思うが。真神湾は穏やかな海であるゆえ」

海に到着するとトラックは砂浜に下り、ボートを下ろした。救命胴衣を抱え上げて配ろうとした哥舞妓くんが動きを止めた。

「あれ、普薫くんがいないぜ。一枚かんでいるって聞いていたけれども、彼はどうしたんだい」

叭羅蜜斗さんが応えた。

「さあ、今ごろ気が附いたか。なに、気にすることはない、哥舞妓。」

奴は気が向かないんだ。繊細で難しいのさ、奴の自然はね」

胴衣を着用し、その上から雨具をかぶり、四人でそれツと声をかけ合
いながら砂に跡し、舟を押す。力を込めるときに下を向くが、砂地が舟
底に轢かれ、掘り起こされるのが映る。濡れた砂が粒を晰らかにさせる
その存在が心地よく胸に沁みる。

少々風が出てきていた。哥舞妓くんが手を翳し、安房島を望む。着物
の裾が旗めく。島までの距離は三〇〇mくらい。妓戲的な、楽しい、偽
りの冒険だ。セルロイドのような触感がある。哥舞妓くんは芝居がかつ
た大振りな口調で皆を鼓舞するかのように言った。

「行けるだろさ。」

彝之家分家の俺がいることには意義があるんだぜ。彝之は大昔から島

に奉獻しているからな。それに俺はイタルくんの遠縁だ。完璧だね。

今回はこう云うのが大事なんだろう、真分」

波に泛べてから飛び乗った。舟底が鼓する。原初的な音だ。なにをも顧慮しない、剛胆なクロマニヨンの戦士たちが炎を囲んで戦勝を祝い、踊る。そのリズムは大型動物の大腿の骨と頭蓋骨とによつて鳴らされる。漕ぎ出した。

雨の無数の紋が瞬時現われ、波に消される水面が存在の持つ深い沈黙の神秘を湛えているように錯覚される。

急に雨が烈しくなる。私たちはポンチョに附属のフードを深くし、眼を細める。オールを握っていた哥舞妓くんが手を放して顔をぬぐい、大

笑してみせた。

「さて、こいつはイタルくんの崇りか。それとも真神の産土神の怒りか。もしイタルくんの崇りなら遠縁の俺がいても効果なしってことか。或いは神の怒りなら、分家ふぜいの天之家じゃだめってことか。

どうかね、老師」

漸くパイプに傘の形をした小さな屋根を附け終えた真分くんが澄ました表情で応じる。

「それもまたよし。

さあ、漕いでくれたまえ。天に訴えても舟は進まぬゆえ」

「うふう。冗句だぜ。軽ろらかに逝こうさ」

安房島に近附くにつれ、その存在感が雨雲の空を領するかのような幻惑を覚える。自分たちが波に揺れているのに大岩が鼓動するかに見える。かくてずぶ濡れになりながら漸く着いたものの、接岸ポイントを探すためにしばらくは右往左往しなければならなかった。

探しながらも、岩が独特の迫真性を以て私たちを圧迫するのを感じずにいられない。たとえ異多琉が晴天の日にここを訪れたのだとしても、独り舟を漕ぐ心情に鬼気を感じた。

安房島は濃い灰色で全体に岩膚がのっぺりしている。当然自然物にありがちな整わざる形状を做してはいるものの、細部を略し、全体を概観すれば立方形である。しかし穏やかでも優しげでもなく、のっぺら坊の

不気味さがあつた。傍らまで来ればだれしも睥睨されるかのような威圧を覚えるに違いない。

海面からすぐに切り立った岩は湾に突き刺さった石刀のようにも幻想される。

接岸ポイントは浜から見て裏側にあたる部分にあつた。なだらかな膨らみのような小さな岩が二つ、海面からぬっと抜き出ており、その二つの間がミニチュアの湾を形成し、奥がささやかな斜面を做している。艀綱をかけるに好都合な岩の凸部もそこにあつた。

どことなく、人工的と思えなくもない。そんなはずもないが。

「この上を確認する計画でしたが、どうやったら上がれるでしょうか」

四、5mはあろうかと思われるのつぺりした絶壁を見上げながら、私が呟くと、哥舞妓くんが言う。

「いや、それほどでもないぜよ。ちくとばかりよく見ろ、少し左に廻れば、ほら、あの辺りだ、手がかり足がかりが掘られている」

「ええっ、あれですか。上がれますか。垂直ですよ」

ただ垂直だけでなく丸みを帯びて膨らむ部分もあった。

今度は真分くんが言う。

「見たまえ。あの岩の亀裂に隠れているのが見えるだろう、そら、短いが、綱が垂れているじゃないか。あそこまでの行き着けたなら、あれが使えるようだ」

岩の上部にある裂け目に隠されるかのように傷んで毛羽立った綱が2mばかり垂れているのがわかった。いつのものが正確にはわからないが、いずれにせよ、さほど古いものには見えない。せいぜい昭和の中期くらいだろう。

哥舞妓くんが笑ってみせた。

「恐ろしげに見えたものも、こんなもんだな。現実をやってみようとすると、案外平々凡々な、日常生活の一環なのさ。昔からここに上る用があつたんだから便宜が図られていて当然だ。

ええ？ それでも危なげに見えるか、隆臥。

心配するな。最悪、落ちても海だ。海神に栄えあれ。あの辺りに岩は

ない。古人も莫迦じゃないのさ」

叭羅蜜斗さん、真兮くん、私、哥舞妓くんの順で独りずつ上った。

濡れて滑りやすくはあったが、案じたほどの難儀はない。しかし、高さがあるので怖いことは間違いなかった。異多琉はここに独りで上ったはずなのである。

私はどうにか上り詰めたとき深く安堵の息を洩らしたものだ。

岩の上は側面とは異なり、荒々しく尖った起伏があつて複雑な形状であつたが、大雑把に言つて低い部分と一段高くなっている部分との二段階になっていた。その段差の部分が先ほどの裂け目になっている。くるぶし高の雑草が半ば干からび、風に揺れていた。潮風に揺らぐ松枝は頭

にぶつかる。

祠は高い段の方にあつた。高いと言っても三〇cmくらいか。予想に反して『空』は置かれていなかった。

真兮くんが言った。

「ないね。」

しかし、燃やした可能性もある。焼き痕なんか残らないだろうから確認のしようもないが。

むろん、来なかったのだと云う考えも成り立つ」

叭羅蜜斗さんが言う。

「俺は来たと思うよ。」

はつきりと感じる。ここに立つて今、確信になっている。物がなくて問題はない。奴のことだから、どんな奇想天外な思い込みをしていたのかわからない。なにもしないと云う意図も選択肢の内だし。または持つて来ただけで置かなかったとか。

少なくとも今『空』がないからと言ってイタルが来なかったとは限らないと云う考えに異論はないだろう。

ないことの説明はその気になればいくつでも考案できる。燃やした可能性も他の事例から考えれば高いと言えるだろうし、また場所から言うて飛ばされた可能性だって普通にあり得ることだ」

私は正論で反した。だが、もうなにが起こっていても不思議はないよ

うな気がしていて、正直殆ど本気ではなかったが。

「ですが、置くつもりなら風ぐらいは考慮して措置するでしょう」
呎羅蜜斗さんが笑う。

「それでもないさ。」

置くこと自体に意義ありと考えたならばその状態のまま在り続けることに執著する必要はない。却ってそれを潔しと奴が感じた可能性だってある。飛ぶなら飛べ、自然体が尊し、なんて考えた可能性がね。

奴は理解されることや知られること、世間から評価されることを価値基準と見做していなかった。

人間から賛同を得ようとすることを無意味な行為だと感じていた。賞

賛の声など肺臓からの息吹に過ぎない、山野の風となに変わるものか、と云うぐあいにね」

私はぼんやり沖の方を眺めた。二つの岬とその間に横たわる太平洋。水平線の位置は雨に煙って灰色の空と溶け合っていた。

「なにもない、なにもしない。つまり『空』ってことかもしれませんよ。ここには来たけれど置きもしないし、持って来もしない」

真兮くんが笑った。

「小生も瞬間考えなくなかったが、それならここに来もしないと云う究極の選択もあるだろう。」

いや、それ以上の究極がある。

いずれをも意図せず、そんなことは考えもしなかったと云う選択だ。

だが、それは選択と言えるか。意図してそれをなすことは難しいだろう。と言うか、矛盾だ。全く不可能だ。いや、もし可能だとしても、そんなことになんの意味があるか。それとも意味なきことを『空』と言うか。

少々莫迦らしくもある。

いずれにせよ、事實はわからない。

来ることなんか考え附きもしなかったかもしれないし、考えたが、意図的に来なかったかもしれないし、来ても持って来なかったかもしれないし、持って来ても置いて行かなかったかもしれないし、置いておいてもすぐその場で燃やしたか切り裂いたかもしれないし、置いたが、飛ばされた

のかもしれない。

いずれにあっても『空』にふさわしかったとも言えるのかもしれない

」

叭羅蜜斗さんが天空を見上げて言った。

「結局は思い込む他はないか」

私は水平線があるであろう方角を眺め続けていた。眼に雨粒が頻りに入る。拭い、見やる。雨粒が入り、拭う。また遠望する。

咆哮する松の枝と岩石に碎ける波頭とが広大な空間を領し、響鳴していた。

私たちは数日後、彝之イタルの実家に行っている。

真兮くんが、太郎くんを仲介者として遺族の了承をもらい、盛夏某日正午、異多琉の部屋に上がることができたのである。最後にそのときの模様を記録し、附しておこう。

家屋敷は彝之家の一端に属する家柄らしく、本家の豪壮には到底及ばないけれども、瓦屋根が胸を張る、かなり大きな家であった。

山の向こうの蒼穹に真つ白な入道雲が聳える日で、蟬が強く鳴いていたことを憶えている。

部屋は使われていた当時のまま残されていた。時が止まっているかの

ようでもあったが、むしろそれゆえに存在の上に歳月が積もり、佇んでいるかのように見えた。

私は十七歳の息子に先立たれた両親の悲しみを感じた。だれがそうせずいられようか。人間として世間一般に通融する、日常生活的な感情である。彼は一人っ子だった。異多琉は自らの思いを遂げるために家族がどれほど悲嘆するかを瞬時でも考えたのだろうか。彼はよかったかもしれない。だが、家族の気持ち、生き残った者たちの気持ちはどうなるのか。真理のためか、芸術のためか、それは人の情愛を無にしてまでも遂げるべき正義なのか。どちらを取るべきなのかと私に問われれば答は決まっている。いや、言うまい。異多琉も当然考えたに相違ない。

それに彼は既に逝ってしまったのである。その事実だけが真実である。部屋は八畳でなんの変哲もなく、よく整理されていた。机は木目の模様が美しく、全体に嵌木細工がなされ、彫りが施され、脚が猫科のような曲線に工作されていた。その上に（今となつては）古いパソコンが置かれ、デジカメやいくつものDVDが積まれている。

キーボードの傍らに銀の象嵌細工がされた年代もののモンブランの万年筆が置かれていた。

本棚は私の背よりも高く、森厳な沈黙に包まれ、整然と書籍が並べられている。トルストイの全集やハイデガーの主著、ホメロスの叙事詩、ポー全集、マラルメ詩集等々古典的な書が詰められていた。『南総里見

八犬伝 第一巻』の左隣が『モンテ・クリスト伯 第五巻』、その隣が空
きとなっていて、アレクサンドル・デュマの著作は曲亭馬琴の伝奇物に
斜めに立てかけられていた。

オーディオの上にジョン・レノンのCDが無造作に置かれている。

机とベッドとの間に据えられたテーブルの上に『空』が十冊。五冊子
ずつ角を寸分違わず合わせられ、一糸乱れぬ二つ山に分けられ、置かれ
ていた。

窓

